

世界教養プログラムにおけるオンライン授業 —「映画論A(集中講義)」の実践報告—

A Case Study Report on the Online Intensive Class: “Film Studies A” of the World Liberal Arts Program

白井史人
Fumito SHIRAI

はじめに

本稿は、2020年度の名古屋外国語大学世界教養プログラムの応用科目「映画論A(集中講義)」の報告である。本講義は、2019年にシラバスを作成した時点では対面で実施予定であったが、コロナ禍の状況を鑑み、2020年7月30日(木)～8月4日(火)にオンラインで実施した。ここでは、授業の計画、実施、課題提示などのフェーズに応じて生じた問題や解決方法に関して、学生からのフィードバックを踏まえた実践報告を行う。個別の授業において生じた問題と実践例の記録を残し、オンライン授業の課題や可能性を探る一助とすることを旨とする。

2020年度前期に日本の各大学でオンライン授業が導入されることになり、公的・私的にさまざまなネットワークが構築され、大学教員間でノウハウに関する情報交換が進んだ。刊行物としては、各大学の紀要における報告のほか(山本ほか 2020)、人文学分野における研究者のSNSを中心とした繋がりによって生まれた『遠隔でつくる人文社会学知 2020年度前期の授業実践報告』などがある¹。本稿は、論集が提唱する「コロナ禍に高等教育機関の教員達の集合知を形成する」ための作業に連なるものである(大嶋ほか 2020: i)。

第1節では本講義の計画と概要を紹介し、第2節では、オンデマンド動画と

リアルタイム双方向授業を組み合わせる事例として、該当する回の具体的な内容と受講生からのフィードバックを提示する。むすびに、現在の映像文化やパフォーマンスをめぐる現場や研究の問題と、オンライン授業との経験との関わりを指摘することで、本学における特定の実践を、学内外における同様の試みとの比較検討の題材として提供したい。

1. 授業概要・計画

1.1 シラバス

シラバスに掲載した本授業の概要および授業方法は以下の通りである。

授業概要

映画と現実はいかなる関係を切り結んでいるのか。本講義は、この問いを出発点にオリンピックを主題とした映像を扱う。無声映画期の映画の特徴やトーキー映画への転換、さらに第2次世界大戦後の映像スタイルの変遷など、映画史の基礎知識と分析手法を学んでいく。具体的な映像作品を検討しながら、映像文化を客観的に分析し、映画と社会との関係を批判的に捉える視点を涵養する。

学習目標

無声映画期から第2次世界大戦後にいたる映画史の基礎的な知識を身につける。また映像や音響を分析する手法の基礎を習得する。歴史的な映像から現在のスポーツ中継にいたる映像を具体的に論じる視座を獲得する。

準備学習

授業中に紹介し分析する映像はもちろん、無声映画や記録映画など、普段なじみのない映像にも積極的に触れること。著作権に充分配慮しつつ、オンラインのウェブサイトや動画配信サービスを積極的に活用してほしい。

目標達成のための授業方法

視聴覚教材を活用した講義形式。無声映画や記録映画などの映像を分析するほか、デイヴィッド・ボードウェル、ミシェル・シオン、メアリー・アン・ドーンら映像研究の基礎文献を検討する。またリアクション・ペーパーや分析実習を適宜導入し、映像を自ら分析し論じる訓練を行う。

本授業はClassroomに授業サイトを準備する。毎時間、受講者にパワポ・収録映像などで資料と課題を提示するため、Classroomにアクセスすること。課題提示・提出を中心とする。映像分析に関する回では、受講者の通信環境に応じて、リアルタイムチャット等での議論の機会を設ける。

上記のうち、マークした部分は、オンラインでの実施が決定してから修正・追記した。それ以外の授業構成に関しては、オンライン化に伴う大きな変更はない²。

1.2 授業構成

各回の構成は【表1】の通りである。本学では、筆者が担当する「映画論A」を含め、「映画論B」や「映像メディア」などの授業が開講されている。各科目を異なる教員が担当し、一般的な映画史や映像メディアの基礎知識を学んだ上で、教員ごとの専門を生かした特性を出すことで差異化をはかっている。今年度の本講義の履修者は、75名が登録、出席者は65名であった。

最初の課題となったのは、オンライン集中講義のスケジュール構成である。プラットフォームとしてClassroomを使用し、オンデマンド動画とリアルタイム双方向の組み合わせることとした。筆者は2020年度前期に、本講義にくわえ、3~4年生の専門ゼミナール「世界教養ゼミナール」(10~20人)でのリアルタイム双方向授業(Zoom使用)、オムニバス講義でのオンデマンド動画授業、1年生向け演習科目「アカデミックスキルズ」でのMoodleを使用した課題提示・提出型の授業、「ドイツ語初級文法」(履修者約20名)では動画とリアルタイム双方向授業を組み合わせる方法を採用していた。その経験を踏まえると、一日4コマの90分授業をリアルタイム双方向で実施するのは、

【表 1】

日	講時	回	テーマ	授業形態
7/30	1	1	ガイダンス：映像とオリンピック	前半にリアルタイム
	2	2	映画史①映画の誕生	オンデマンド
	3	3	分析実習①ショット分析	リアルタイム
	4	4	無声映画とオリンピック	オンデマンド
7/31	1	5	映画史②無声映画からトーキーへ	オンデマンド
	2	6	作品分析①	受講時に指示する
	3	7	分析実習②映像音響分析	リアルタイム
	4	8	映画と戦争：プロパガンダと武器	オンデマンド
8/3	1	9	映画史③第2次世界大戦後の映画： ヌーヴェルヴァーグ	オンデマンド
	2	10	作品分析②	受講時に指示する
	3	11	分析実習③モンタージュ	リアルタイム
	4	12	劇映画／記録映画	オンデマンド
8/4	1	13	オリンピックとテレビ	オンデマンド
	2	14	コロナ禍におけるスポーツ映像	リアルタイム
	3	15	終了時課題	リアルタイム (Classroom使用)

通信量や体力の問題から不可能である一方、すべてのコマでオンデマンド動画を視聴させ、各時間のコメントなどをチェックし授業を管理するのは、受講生や管理する教員にも過度の負担となると判断したためである。

具体的には、表1に掲げた構成で、各日の1限（9:10～10:40）と4限（15:00～16:30）を原則オンデマンドに、昼食休憩後の3限（13:20～14:50）はリアルタイム双方向とした。基礎的な知識の定着をはかる内容はオンデマンド動画に組み込み、リアルタイム双方向授業では、その内容を補い、文献講読や分析などのアクティブな要素を組み込んだ。また昼食休憩後の3限をリアルタイム授業とし、4限をその後の当日中に受講すれば良いオンデマンド動画とすることで、オンライン授業においても受講生の生活リズムが作りやすいよう努めた。リアルタイム授業の回数を限定し、通信環境に問題がある場合も最低限単位の取得が可能となる構成とした。

ただし、オンデマンド動画は基本的には第1回からの内容を踏まえて順次進行する構成で、第1回はその日の午前中、第4回は当日中に受講することをノルマとしたため、受講者を全日拘束する点は否めない。オンラインかつ猛暑という受講条件のなかで学生からの受講上の要望などがなく、各日の終わりの回にClassroomを利用してアンケートを実施した。記名での任意回答とし、アンケート回収率はそれほど高くないが(回答24名/受講生65名)、回答率も含めリアクションとして記録しておく【資料1・2】。

1日目終了時の主なリアクションとしては、第1回のリアルタイムで実施したガイダンスの際に、音声聞き取りにくかった点への指摘が多かった。これは、PCマイクなどの教員側の環境に由来する問題であることが判明したため、第3回のリアルタイム授業の際に修正した。このほか、学生からのリアクションを踏まえ、主として1日目の動画の音量や時間に関する要望にもとづき、2日目以降のオンデマンド動画の収録時間を減らし、興味と体力がある学生向けのリンクを別に設定することで対応した。

1.3 出席・評価

出席確認や評価は、各回のコメント、2日目の小テスト、4日目の最終講時に筆記試験を組み合わせた。筆記試験は、映画史の知識を問う穴埋め問題と、演習の分析方法を踏まえた論述で、Classroomでの課題提示および提出とした。成績評価に関して、授業実施後に問い合わせはなかった。

2. 授業の実施にあたって ― オンデマンド動画とリアルタイム授業の組み合わせ

本節では、授業の具体的な実施方法に関して報告する。

動画授業では、とりわけ映画史の基礎知識の習得を目的として、パワーポイントで教員の解説音声を録音する手法で作成した。それに対し、リアルタイム双方向を導入した回には、主としてオンデマンド動画ではカバーしにくい文献講読や分析実習を行った。

具体的には、第3回に映画のショット分析に関する文献講読および分析実

習、第7回に映像音響分析に関する講読および実習、第11回には、映像を組み合わせて編集する際の「モンタージュ」という概念に焦点を合わせた実習を実施した。

授業の進行方法に際して、第3回および第11回の内容を紹介しておく。

2.1 第3回 ショット分析

第3回は、映像を分析する際の基本的な枠組みとなるショット分析の解説・実習を実施した。授業開始時に文献『フィルム・アート 映画芸術入門』³の一部を閲覧させ、学生が各自文献を読む時間を設けた。さらにClassroomでワークシートを配布した。

授業の冒頭ではZOOMを利用して、参考文献の講読を行い、ワークシートの最初の課題「文献『フィルム・アート 映画芸術入門』を読んで、以下の意味をまとめよう」【表2】に取り組んでもらった。出席者に文献の重要箇所を音読してもらい、さらに各自で黙読し、映像のショットのサイズやカメラアングルに関する基礎用語の説明を抜き出す課題を課した。各自のPCでワークシートを記入させるとともに、Classroomのストリームへのコメントとして指名した受講者に解答を書き込ませた上で、Zoomを使用しリアルタイムで解説をくわえた。

次に、これらの用語を使用して分析するための練習として、はじめの分析映像として1分程度の映像を視聴させて、ショット数と内容を事前にまとめ

【表2】

○文献『フィルム・アート 映画芸術入門』を読んで、以下の用語の意味をまとめよう

用語	説明
ハイ・アングル	
ロー・アングル	
ロング・ショット	
ミディアム・ショット	
クローズ・アップ	

た表に、各ショットのサイズを記入させた。次に、二つ目の分析映像例で、ショットの数をかぞえるという映像分析の基礎作業を行わせたのち、ハイ・アングルのショット数を数えさせるという課題を与えた。

映像をショットに分けて分析する経験に慣れない学生も多く、対面授業で同じ内容を実施した場合でも計測ショット数が一致しない場合が多い。この課題は、学生に正しく数える技術を身につけさせるよりも、「ショット」という客観的な指標も、意識的に捉えるには一定の慣れが必要であることを感じとってもらうことが目的である。対面授業では挙手させる場合が多いが、Zoomのスタンプ機能を使用して周囲の反応が受講生同士にも伝わるようにした。

また分析映像例2では、解答を与える前に、Zoomのブレイクアウト・セッションを用いて3~4名でディスカッションする時間を設けた。こちらでは、それぞれが自分で導き出した回答を比較させることで、映像を特定の視点から分析する際の難しさに気づくことを目指した。

授業の終了時には、これらのディスカッションや回答・解説を踏まえた上でワークシートをClassroomでアップロードさせた。授業内で正答を与えている以上、ワークシートの正誤は各回の評点に反映せず、あくまでも出欠の確認用とした。

以上が、リアルタイム授業での分析実習の具体的な方法である。これらの方法は、第4回のオンデマンド動画の視聴およびコメントへ応用させた。

2.2 第11回 モンターージュ実習

3日目は、第2次世界大戦後の映画を大きなテーマとして、1限に戦後のフランスを中心に勃興し世界的に広がっていったヌーヴェルヴァーグの特徴を動画授業で概観し、2限にその流れのなかにあったオリンピックの記録映画『東京オリンピック』（市川崑総監督、1964年）の分析を行った。

3限の第11回には「モンターージュ」という概念に着目し、文献講読を行うとともに、映像編集へ受講者の目を向けるための実習授業とした。その際に、受講者の手元にPCやスマホがあり、オンラインへのアクセスが保証されて

いるオンライン授業の特性を生かすために、ウェブ上で画像を検索したり、自身の手元のカメラやスマホで撮影した画像を提出させる課題を課した。

課題の内容は以下の通りである。

【課題】 エイゼンシュテイン『ストライキ』の牛のショットに変わる画像を作成し、新しいモンタージュのシークエンスを作ってみましょう。

(期限：8月3日 ~23:59)

※静止画でOKです。画像を1枚アップロードしましょう。

※自分で撮影したものでも、ウェブ上の画像でも構いません。

※スクリーンのキャプチャにはSnipping toolなどのソフトが有効です。

課題としたシークエンスは、図1の通りである。ストライキを起こした民衆が弾圧されるショット①③の間に、牛が屠殺される場面のクローズ・アップが挿入される。牛のショット②は、時間・空間的には前後のショットとつながりを欠いている。

【図1】



上記の課題を課す前に、ショットとショットを並べることで、一つのシークエンスで新たな意味が生じる、というソ連の映画監督セルゲイ・エイゼンシュテインが提唱した概念をリアルタイム授業で解説した。さらに、この場面をエイゼンシュテイン自身が分析している文献「ディケンズ、グリフィス、そして私たち」の一部を読ませ⁴、私自身も3つの画像例を提示した（『民族の採点』のあるショット、トランプの演説、野菜の調理画像）。既存のシークエンスの一つのショットを入れ替えることで、映像編集が生み出す効果を実践的に感じることがこの課題の目的である。

十分に時間や機材が確保されていれば、グループワークを導入した動画撮影や編集なども含めて実施するのがふさわしい課題である。しかし、90分で解説と実習を終えるというスケジュール上の条件や、画像・映像の確保とアップロードにともなう時間や通信量の面を考慮し、静止画1枚という条件で課題を提出させた。

他の回と性格が異なるため、リアルタイム双方向での説明時には学生の反応も掴みづらく、課題の意図が伝わっているか心許なかった。しかし実際に提出された画像や授業後のアンケートを確認すると、受講側にはスムーズに意図が伝わっていたようである。提出された61件の画像のうち、教員が数件を選んで、翌日の第13回に他の学生がどのような画像を選んだか閲覧できるようにした⁵。

提出された画像例は図2~4のようなものがあつた。大きく区分すると、エイゼンシュテイン自身の試みと類似した方向にくわえ、オリジナルのクロス・アップの要素を取り入れた画像【図2】、民衆たちをメタ視点から眺める画像【図3】、アニメや広告風イラストなどの異なる文脈をぶつけることで異化的作用を及ぼす画像など【図4】、いくつかの方向がある。受講生が映像編集によって生まれる意味作用の変化へ目を向けるには十分な成果が挙げられた。

画像をひとりひとり選ばせる課題は、もちろん対面授業やオンデマンドでも自習課題として提示できる内容である。ただし、「Classroom経由で画像アップロード→全体の成果を共有」という流れは非常にスムーズで、オンラインの方が実施しやすい面があつた。反対に、受講生同士の横のつながりが薄い全学大人数講義では、3~4人のブレイクアウト・セッションを使用したディスカッションは、有効に機能しなかつた面もあるようだ。

【図2】



【図3】



【図4】



2.3 授業運営上の問題

本授業の運営にあたり、「映画」という対象に特化した問題も残った。

まずは、授業で視聴する画質・音質の環境による劣化という問題である。Zoomなどで映像を共有すると、「学生側の環境では再生されない」「映像と音がずれる」などのトラブルが免れない。また、映画や音の分析に耐えうる質で共有したり、視聴させることはできない。Zoomなどの設定（送信側・受信側）で改善する場合もあるが、原理的な劣化はまぬがれないことを受け入れる必要がある。

また映画論である以上、暴力、ホラー、性などに関わる映像・画像を解説

する機会もある。教室での授業実施においても、こうした要素が含まれる映像を扱う場合は事前に予告しているが、状況によっては家庭内での受講となる受講生もいることが想定されたため、より注意が必要となった。

オンライン授業の受講環境に関しては、思想家の東浩紀が以下のように指摘している。

そもそもいまはステイホームがいいことだとされていますが、「ホーム」こそ格差の温床です。PCやタブレットを用意できる家、通信環境をきちんと整備できる家、平日親がいて子供をちゃんとみることができ家……。こうした環境が整っているのならオンライン教育もいいでしょうが、果たしてそんな家ばかりでしょうか。[…]

多くの方は教育の本質を「知識を伝えること」だと考えています。そのとおりですが、その本質だけ見ると、物理的な教室という「非本質的なもの」がなくてもオンラインで知識を伝えれば教育は成立するという発想になる。

けれどもそれではだめなのです。本当は教育の本質は、子供たちを家庭から切り離し、一つの場所に「集める」という「非本質的なもの」と切り離せません。

人間は生まれ落ちる家庭を選ぶことができません。家族は偶然でしかなく、生まれた時点では平等と離れた状態にあります。学校には、そんな子供たちを一つの場所に集め、平等な環境を与えるという大事な機能があります。[…]

(東 2021: 115)

本稿の文脈と、ここで小中学校を念頭に東が指摘する格差の問題はやや異なるものの、映画論の実施においては、中立的で平等なある種のホワイトキューブとして機能する「物理的な教室」という空間が、「非本質的なもの」として映画論の内容と不可分である。

教室では、映像を見ている際の学生たちの空気の変化などを感じながら授業を進められるが、オンライン授業では一つの場所に集まって映画をみると

いう集団での鑑賞体験を実感させることができない点はやはり難しい部分である。

2.4 映像文化のなかの「映画論」

ここで、本講義のオンライン授業の経験を踏まえて感じた論点を、いまいちどまとめておきたい。

シラバスに掲載した通り、本講義は、オンライン化を余儀なくされる前から、「映画と現実はいかなる関係を切り結んでいるのか」という問いを出発点としていた。しかし、当初想定していたオリンピックと映画という題材を歴史的・理論的視座から考察するという目的よりも、授業そのものがすべて「映像」となって届くという「現実」に巻き込まれるなかで、「映画」と「現実」が重なり合ってくる現代の映像文化という要素が前景化してきた。目の前のPCやスマホのスクリーンを見つめながら、出席ログが記録され、内蔵されたカメラで教師側のスクリーンで監視される状況は、現代の映像文化で指摘される「イメージの遍在」をこれ以上ないリアルな形で示している。

21世紀の映画／映像の世界をおおまかに展望してみよう。いま、世界にはかつてなく「イメージ」が溢れかえっているとよくいわれる。街中のいたるところに設置された監視カメラ映像をはじめ、高層ビルの壁に掲げられたデジタル・サイネージから電車やデパート内の広告モニター、デスクトップのインターフェイス、デジタルテレビのブラウン管、そして何よりも日々手にするスマートフォンやタブレットの液晶画面……。実際それは、わたしたちにとってごく見慣れた日常の風景だろう。(渡邊 2021: 9-10)

第1回の授業のガイダンスおよび第14回のまとめでは、映画と現実をめぐるこうした問題を強調することとなった。そして、当初想定していたオリンピックの競技映像の分析は、授業実施の数日前の2020年7月23日に公開された「一年後へ。一歩進む。～+1メッセージ～ TOKYO2020」におけるヴォイ

スオーヴァーと映像との関係が生み出すポリティクスの批判的分析へと内容を変更した⁶。こうした変更によって、スポーツ中継映像の分析と形は異なるものの、映像と社会との緊密なかかわりをパフォーマンスティブに問うことができたことは、一つの収穫であったように思う。

むすびにかえて

むすびに、オンライン授業における教師と受講者との関係や、授業の実践を検討する上で、一つの参照項となる議論に触れておきたい。それは、パフォーマンス・アーツ研究における「媒介された（メディア化された）ライブ性」という視点である。

音楽、演劇などのパフォーマンス・アーツも、コロナ禍において大きな影響を被った⁷。ここではとりわけ、ロックコンサートを主たる対象として「ライブ性 Liveness」が歴史的に構築されてきた点を考察するフィリップ・オースランダーの議論を参照したい。オースランダーが指摘しているのは、「ライブ・パフォーマンス」などで使用される際の「ライブ」という概念が指し示すものは、対概念となる「メディア化された形式」との関係のなかで、歴史的に分岐し変化してきた点を指摘している。素朴な「ライブ」の概念は、演奏者と観客が身体的および時間的に共存している状態を指す。しかし、その概念の揺れは、「ライブ・レコーディング」という語義矛盾ともいえる音楽上の概念を思い浮かべれば明らかであろう。「ライブ・レコーディング」は、観客を入れずにスタジオで録音し、セクションごとに録音をしたり、ダビングなどで音を加工する「スタジオ・レコーディング」という実践が登場したことで、観客を前にした演奏を録音したものを「ライブ・レコーディング」として差異化するためのものである (Auslander 1999: 60)。

「ライブ性」の概念の変遷を、オースランダーは表3のようにまとめている【表3】。

【表3】

ライブ性の類型	主な特徴	文化形態	授業形態・ツール
「古典的」ライブ性	パフォーマーと観客の物理的共存、生産と受容の時間的同時性、瞬間の経験	演劇、演奏会、ダンス、スポーツなど	対面授業
ライブ放送	生産と受容の時間的同時性、イベントが生じた通りの経験	ラジオ、テレビ、インターネットなど	リアルタイム双方向
ライブ録音	生産と受容の間の時間的ギャップ、無限の受容の可能性	LP、CD、映画、DVDなど	動画授業
インターネットのライブ性	ユーザー同士の共存の感覚	インターネット媒体	Classroom／Moodleなどのプラットフォーム
ソーシャルなライブ性	他者とのつながりの感覚	携帯・ショートメール	Classroom／Moodleなどのプラットフォーム
「ライブ化される」ウェブサイト	技術とユーザーの間のフィードバック	ウェブサイト、インタラクティブ・メディア、チャットボットなど	Google formの自動返信機能を活用した自習課題など

(Auslander 1999: 61 より。「授業形態」は筆者が追記した)

上記の表で着目されるのは、オースランダーが社会学者ニック・クドリーの議論を参照してまとめている「インターネットのライブ性 Internet liveness」と「ソーシャルなライブ性 Social liveness」である。2020年代の学生にとってより馴染みがあると考えられるこうしたライブ性を創出しうる余地があるのは、本学が公的に採用しているツールではClassroomおよびMoodleなどのプラットフォームの活用であろう。単にリアルタイムで授業を実施するにとどまらず、こうした新たな「ライブ性」を、プライベートなSNSの空間とは異なる公共性や公平性を担保しながら展開することは、今後のオンライン授業を生き生きと維持する上での重要な着眼点かもしれない。

「ライブ性」をめぐる議論は、パフォーマンス・アーツ研究の分野ではコロナ禍以前から盛であったが、こうした議論と通底する問題が、コロナ禍での大学における授業をめぐる噴出したものと言える。「オンライン」という状況に置いて、あらためて「対面＝ライブ性」の意義や、「出席」や「参加」と

いった概念そのものが問い直される現在の状況は、まさに映画やパフォーマンス・アーツが直面する課題と同根である。「映画論」の実施にあたって、筆者が今後「オリンピック」を題材とする可能性は低いが、変化する社会と映画の双方の状況をにらみながら、対面およびオンラインの意義を見極めて、組み合わせながら実施することだろう。

注

- 1 刊行された報告集のほか、さまざまな学会でコロナ禍における授業や研究発表の実施に関する研究会が開催された。管見の範囲でも以下のような試みがあり、授業実施機関が定める条件下（使用ツール、通信量、著作権など）で、持続可能な授業運営が模索されていたことが浮かび上がった。
 - ・日本ポピュラー音楽学会2020年度第2回オンライン例会・JASPM32大会関連企画「オンライン学会発表と法的問題―「公衆送信」における音楽・映像配信の諸問題を中心に」（2020年11月29日、増田聡、安田昌弘、琴太一）
 - ・日本ドストエフスキー協会主催「フョードル・ドストエフスキー生誕200年記念シンポジウム」でのシンポジウム（1）「コロナ禍時代に考えたこと」（2021年2月28日、話題提供：沼野充義、パネリスト：林良児、甲斐清高、白井史人、梅垣昌子、藤井省三、野谷文昭、番場俊、望月哲男、越野剛、齋須直人）
 - ・日本音楽学会東日本支部定例研究会「コロナ禍下での音楽関連授業のあり方をめぐって：事例報告と今後の展望」（2021年3月12日、コーディネーター：木村直弘、パネリスト：朝山奈津子、谷口昭弘、宮澤淳一）
- 2 本講義は、当初、2020年に東京オリンピックが予定されていた時期と重なっていた。オリンピック映像の歴史と分析という題材で映画と社会との関係を考える内容の授業を構想した理由は、集中講義と並行してテレビやウェブ上に多く流通することが予想されるオリンピックに関連する映像を、映像の歴史・理論を踏まえた上で批判的に捉え直すことを狙ったためである。そのため、オリンピックの延期に伴い、授業方法のみならず、テーマと構成に関して、若干の変更を行う必要があった。
- 3 デイヴィッド・ボードウェル、クリスティン・トンブソン 2007 『フィルム・アート 映画芸術入門』 藤木秀朗（監訳） 愛知：名古屋大学出版会
- 4 エイゼンシュテイン 1980 「ディケンズ、グリフィス、そして私たち」『エイゼンシュテイン全集6』 エイゼンシュテイン全集刊行委員会訳、212～218頁、東京：キネマ旬報社
- 5 画像共有には著作権などの問題があるため、授業内での閲覧に限った。
- 6 「tokyo2020」のyoutubeチャンネルなどで公開されている（<https://tokyo2020.org/ja/news/videos/one-step-forward-plus-one-message-ja> 最終閲覧：2021年4月1日）
- 7 コロナ禍によって実施が予定されていたが、中止となった公演チラシを収集し展示することで、こうした状況の記録および可視化をはかるころみとして、早稲田大学演劇博物館のオンライン展示「失われた公演：コロナ禍と演劇の記録／記憶」（2020年）がある（<https://www.waseda.jp/prj-ushinawareta/> 最終閲覧：2021年4月5日）

参考文献

- 東浩紀 2021.3 「「自由」を制限してもウイルスは消えない」『文芸春秋』第99巻3号: 110-117
- 大嶋えり子、小泉勇人、茂木謙之介（編） 2020 『遠隔でつくる人文社会学知 2020年度前期の授業実践報告』 電音学術出版（オンライン）
- 山本恵、若山公威、真鍋和弘、宮本真有 2020 「オンライン授業実施状況の調査と分析」『名古屋外国語大学論集』第8号: 1-75
- 渡邊大輔 2012 『イメージの進行形 ソーシャル時代の映画と映像文化』 東京：人文書院
- Auslander, Philip. 1999. *Liveness: Performance in a Mediatized Culture*. 2004, 2nd Edition. London/New York: Routledge

【資料1】 ○初日終了時のアンケート（65名中24名回答、記名）

【質問内容】

初日の授業を踏まえ、以下の点で何か要望や問題点があれば書いてください。
成績には一切関係ありません。できる限り反映します。

- ・ 動画やパワポの量
- ・ Zoomでの通信状況（問題があった際は、使用機材も）
- ・ 課題の量
- ・ 課題の提出方法
- ・ 通信環境に何か問題や不安があったか（学生側・教員側）
- ・ その他の要望・質問

期限：7/31（金）まで、随時自由回答

回答内容
特に問題はなかったです。(同様解答、以下11件)
パワポ動画で先生が喋っている途中で次の場面に切り替わった時が何度かあったため、何か聞き逃していないか心配でした。
1限の時の音声の問題が改善されて、問題なく聞き取ることが出来ました。
しかし、動画の音と先生の声量に差があり、長い動画の場合、音の調節に忙しく一旦動画を止めて音量の調節をしないとイケなかったので課題に時間がかかってしまい、時間に余裕のない課題の際に時間内にやりきることが出来るのかと不安になりました。今後の音声調節の改善が難しい場合、今日のように課題提出の締め切りに余裕を持たせて頂けると幸いです。
一日目の講義の際に動画の音と先生の解説の音の大きさの差に戸惑いましたが、本日は大丈夫でした。動画やパワポの量などはちょうどいいです。
[動画を]自分のペースで見れるようになってはとっても助かるのですが、[...]パソコンにかかる負荷がすごく大きそうな気がします。授業中に学生全員が取り組む課題についての説明をズームのチャットで書いてくれるのでとても助かります。先生の声はほとんど普通に聞こえますが、たまにこもっていて音量を大きくしても聞き取れないことがあります。
自宅のWi-Fiに容量の制限はありませんが、1日中沢山の動画を見たりズームをつないでたりしたので、パソコンが重たくなり途中で動画や音声が進まったり途切れたりして困りました。
課題が多いかもしれないです、、、

<p>本日の3限に参加リンクを押して待合室のような場所で待機していたのですが、なぜか一向に許可されず、友人に聞いても同じように許可がされないと言っていました。再起動などをしても効果が反映されず、zoomの授業がなかったのかなと思うくらいでした。今回は突然のハプニングに、メールをする余裕や判断を瞬時にすることが出来なかったのもので、次回はトラブルが発生した際には直ぐ対処できるようにしようと思いました。[…]</p>
<p>本日の第二回授業の動画を4つ用意していただいたと思いますが、メモを取りながらだと100分ほどかかってしまったので、(長さにもよりますが)動画は出来れば3つまでにしていただけると、こちらとしてはまとめやすいと感じました。そこまで過剰に時間が足りない訳ではありませんので、出来る限りで構いませんのでご検討お願いします。</p>
<p>非常に学習しやすかったです。私は特に今日困ったことはありませんでした。課題の量も不満なく、提出方法などもわからない点がなくてとても取り組みやすいと感じました。ありがとうございます。</p>
<p>最近、自分のpcで作業していると、カーソルが消えてしまうことがあります。カーソルが消えると、リアクションやコメントができなくなってしまうため、必要なときはpcを一旦閉じてzoomに入り直さなければいけないので、同じ授業内で何度もzoomに入ったり出たりしてしまうかもしれません。お手数をおかけします。</p>
<p>本日の最後の課題のパワーポイントを開いたり […] できませんでした。同じ内容のMP4があったので課題に全く影響はありませんでした。</p>
<p>パワポの内容をノートに書き写すことが少々大変ではありますが、課題の提出期限を本日中に設定してくださっているので対応できています。また、Zoomのリアルタイムの授業が分かりやすく良かったです。</p>

【資料2】 全回終了時アンケート（65名中24名回答、記名）

【質問内容】

オンライン集中講義を受講した経験を踏まえ、以下の点で要望や感想などがあれば書いてください。内容は成績には一切関係ありません。大学での授業運営の参考にします。（字数自由）

- ・ 日程の設定
- ・ 授業方法（リアルタイム授業、動画）
- ・ 課題の量・期限
- ・ 評価の方法
- ・ 通信環境などの問題（学生側・教員側）
- ・ 対面での集中講義と比較した受講しにくさ／しやすさ etc（過去に対面の集中講義を受けた経験のある方）
- ・ その他の要望や感想

回答内容
毎回先生と一緒に映像を見ると思ってたんですけど、違ったけど大変ではなかったのが良かったです。自分のペースで見れて大変ではなかったけど、集中はできないから毎回リアルタイムでやったらまた違ったのかなと思いました。課題の量は提出期限がまあまあ時間あったから苦ではなかったです。やりやすかったですけど、もし機会があったら毎回リアルタイムでやってみたいです。
zoom授業と動画授業の割合がよくてうけやすかった。
4限連続でも、動画とリアルタイムの融合により疲れることなく受講でき、要点もZOOM内での解説により理解しやすかった。課題の量も丁度よかった。通信環境も特に問題はなかった。
どれもちょうど良いと感じました。しかし、授業で扱う作品がもう少し親しみのある作品だったらよかったなとも感じました。
対面授業のほうが技術的な心配もなくできたのかなとは思いますが、対面のほうが受講しやすかったです。
集中的に講義があるので知識が抜けず積めることが出来よかったです。[...]対面よりも自分のペースで進めることが出来ました。ありがとうございました。
テストや毎回の課題がドキュメントではなくGoogleフォームの方が回答しやすいと思いました。
課題の期限→授業後その日中に提出だったので余裕をもって課題に取り組めた。
授業方法→zoomとパワポ動画を交互に使用した授業を展開していただいたおかげで集中力が保てた。

<p>ストリームの更新ごとに来るGmailが多く、一度だけzoomの案内を見逃してしまったことがあった。先生が常にメールやzoomで対応してくれる点がよかった。</p>
<p>通常の授業と違って見返したりメモが間に合わなかったときに動画を止めれるので受けやすかったです。</p>
<p>受講しやすかった。自分は四年生なのでもうすぐ卒業だが、一年生のときからこのような形式で受講できる授業が多ければよかったと思う。</p>
<p>年代も違ったり、顔もみえないオンラインであったりする点でグループワークではうまくコミュニケーションが取れてない部分があった。</p>
<p>夏休み気分になる前に講義があったため、気を緩めることなく受けることができました。</p>
<p>リアルタイムと動画の両方を使っていたため、とてもやりやすかったです。どちらかだけだと気を張りすぎたり、さぼっていたりしてしまったと思います。</p>
<p>課題はその日中に提出すればよかったので、時間の猶予もあり、無理なく取り組むことができました。</p>
<p>ところどころ聞きにくい場所がありましたが、一日目で解決してくださったので、それ以降は問題なく聴くことができました。</p>
<p>初めての集中講義でしたが、特に通信環境などの不具合もなく、授業に参加することができました。全てオンラインとはいえ、パワポ動画の視聴やzoomの利用など、いろんな形式を取り入れて授業を工夫してくださったことで、メリハリをつけて勉強することができたので、個人的にはとても満足しています。</p>